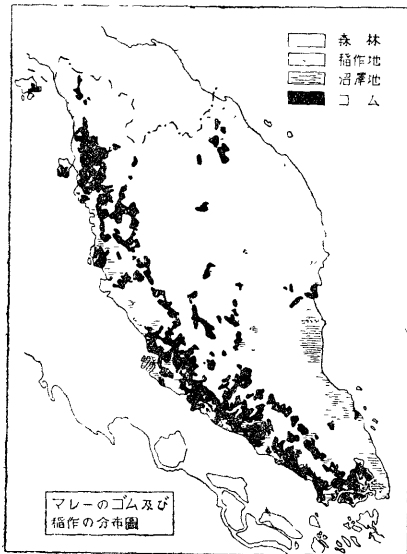


マレーの農業問題

マレーの當面の農業問題は次の二つであると言えよう。

(1) マレー經濟の大黒柱であるゴム栽培の將來をいかにするか。(第二次大戰中のアメリカ及カナダの合成ゴム工業の發達に對していかに競争を有利に導くか。アフリカ、南アメリカ及び南部インドの新興ゴム栽培、インドネシアのゴム栽培の發展に對してマレーのゴムは世界市場に於ける支配力を益々弱めつつある事



マレーのゴム及び稲作の分布

實にいかに対處するか。國內的にはゴム「單一栽培」(“mono-culture”)——而もその價格變動の大きなことは他作物と比較にならない——に起因するマレー經濟の不安定性をいかにするか。(2) 稻作を主とする食糧作物増産並びに商品作物栽培の多様化によるマレー農業の多角化をいかにして促進するか。戦後マレーの農業政策は、この二つの問題をいかに調整してマレー經濟の安定と發展に方向を與えるかという點に根本的な問題が在ると見られる。

* この問題に立入る前に先ずマレーの經濟——農業構造の特殊性を見ておく必要がある。マレー經濟の發展と繁榮がゴム・錫・コブラ産業、特にゴム栽培のそれに最も強く影響されて來た事實は今更言りまでもないことである。

土着民並びに移民の日常生活品でさえ工業製品は全部、農産物の輸出代金によつて賄ねばならない事實から見ても、工業の發達は殆んど皆無と言つてよい。

輸南向農産物生産への特化・食糧・工業製品輸入という經濟構造は、他の東南アジア諸國一般にも共通した特殊性ではあるが、マレー經濟にあつてこの特質は殊に顯著に現われている。それは次の如き農業構造の特徴から明らかに見られよう。

マレー全面積の約六分の一が農耕地で殘餘は森林が殆んど全部を占めるが、農耕地の分布状態は、圖に見る如く大部分が、半島西部及び南部の海岸平野地帯に集中している。

約六三〇万エーカーの耕地中、ゴムが六四%、稻が一五乃至一七%、ココ椰子一一乃至八%を占める。この三作物に油椰子を加えれば四作物の總耕地面積中に占める割合は九二乃至九三%に達し、殘餘の僅か七〇%にその他雜作物が作付されている。

(一九四〇年及び一九四九年「農産物作付面積統計」参照)

農産物加工はゴム、ココ椰子、油椰子共に中途の段階までしか行われず半製品・原料として輸出される。消費用完製品にまで加工される重要産物は僅かに米とパインアップルのみである。(ここにマレー農産物加工業の發展を中心とする工業化への問題がある。)

これらの事實から、マレー農業に於て僅か四作物特にゴムの比重がいかに大きなものであるかは容易に知ることが出來よう。

これら四作物のうちゴムと油椰子は完全に輸南向作物であり、ココ椰子生産物も八割までは輸出される。米だけが殆んど完全な自家消費作物である。従つて輸南向商品作物の作付割合は全作付面積の恐らく八〇%を超えると見て間違いない。しかも輸出作物の四分の三以上はゴムによつて占められている。かくてマレーの農業はゴムに代表される歐米向輸出作物栽培に特化した農業であると言えよう。

更に經營形態から見れば、ゴム作付面積の略々七分の六、油椰子及びパインアップルの全部が夫々専門の農園によつて別々に栽培され、他作物を併せ作することは稀である(單一栽培)。

又、ゴム大農園(百エーカー以上)の五分の四までが歐米人所

面積及生産量

ロング・トン=2,240ポンド=1,016kg)

年	1949年		1950年	
	生産量	作付面積	生産量	作付面積
	402,907	1,970,579	400,009	1,964,370
	294,071	1,394,881	270,248	1,394,881
	696,978	3,365,460	670,257	3,359,251
(2)	208,323	842,450	(2) 187,130	871,470
	9,523	65,620	7,933	59,060
	217,846	908,070	195,063	930,530
	45,257	90,507	50,561	93,331
	8,471		10,459	
	19,011		36,957	
	45,608	499,610	85,980	
	51,164		63,698	
	37,970		43,300	
	-	4,863,647	-	-
	-	88,970	-	-
	-	187,487	-	-
	-	56,900	-	-
	-	63,078	-	-
	-	5,260,082	-	-

もの。「中・小経営」とは100エーカー未満経営。

gantangs=1 ロング・トン、穀 666 gantangs=精白

1939—40年度、以下同じ]

groundnut, maize, yam, Colocasia, Ragi, Soya

Specified Fruits, Mixed Fruits, を含む。

Sireh, Nutmeg, Cloves, Turmeric, を含む。

Kapok, Ipecacuanha, Patchouli, Citronella,

純輸入を示す)

ン, ココ椰子油 69,446 ロング・トン, コプラ・ケー

of the Dep't of Agriculture for the year 1949.”

有(経営)、五分の一が華僑経営であり、中・小経営も約三分の二までが華僑によつて經營され、インド人移民或いは華僑を主たる労働力として何れも単一栽培が行われる。油椰子及びパイナップルも同様に歐米人及び華僑所有の農園に栽培される。これに對して土着のマレー人は主として自家消費向の稲作に従事するが、副業的に數エーカーのゴム或いはココ椰子栽培を行い、或いは賃労働にも従う。(ゴム作付面積中約五〇万エーカー、及びコ

コ椰子の八割がかかる經營によると言われる。)しかし土着のマレー人で輸出向商品作物の単一栽培或いは大農園經營に従事する者は、殆んどないと言つて差支えない。かくてマレー農業の經營形態及び經營主體には二つの型があると言える。一つは輸出向作物殊にゴムの単一栽培に特化した中・大經營(その主體は歐米人及び華僑(その労働力はインド人移民及び華僑)。他は自給を主とする稲作を根幹としながらも現金獲

農 産 物 作 付

(単位：作付面積＝エーカー，生産量＝

	1940年		1948
	作付面積	生産量	作付面積
ゴ ム { 大・中・小 農園 經營 }	2,082,293	331,589	1,952,347
	1,329,791	212,726	1,410,178
	3,412,084	544,315	3,362,525
米 (1) { 水陸 稻 計 }	721,580	(2) 210,077	802,730
	63,870	10,593	82,760
	785,450	220,670	885,490
油 椰 子 { 油 椰 子 油 核 }	78,256	57,972	83,320
		9,611	
コ コ 椰 子 { コ ラ { 大 農 園 } 中 小 經 營 } { コ コ 椰 子 油 } { コ プ ラ ・ ケ ー キ }	600,882	×	510,824
		×	
		×	
		×	
以上四作物合計	4,876,672	-	4,842,153
食糧作物(3)	109,880	-	96,839
果樹類(4)	185,038	-	189,303
香料作物(5)	67,495	-	58,964
その他作物(6)	75,429	-	54,493
總計	5,314,514	-	5,241,752

註 ※：「大農園」とは100エーカー及それ以上の經營面積をもつ

(1)：(2)：穀生産量を示す。単位＝1,000 gantangs [400

米1ロング・トン] 年度は收穫年度である [1940年＝

(3)：Tapioca, Sweet Potato, Sago, Sugar Cane, Beans, Pulses, Vegetables を含む。

(4)：Pineapple, Bananas, Papaya, Cashew Nut,

(5)：Arecanuts, Chillies, Pepper, Cardamon, Ginger,

(6)：Tea, Coffee, Tobacco, Derris, Nipah, Gambier, Gutta Percha, Others を含む。

×：生産量は不明であるが、純輸出入量は次の如し。(一はココ椰子生果 13,146,840 箇，コブラー9904 ロング・トキ一1,215ロング・トン

(資料：Federation of Malaya, "Annual Report Kuala Lumur, 1951,)

得のために副業的に商品作物を併せ作る小經營その主體は土着のマレー人。マレー農業、従つてまたマレー經濟の發展をもたらしたものが前者であつたことは言うまでもない。しかし今世紀初頭以來のゴム栽培の顯著な發展は稻作の伸長を犠牲として行われ

たものである。(前の図に見る如く稻作適地としての西・南部海岸平野はゴム園によつて大部分を占められている。更にマレー人のゴム栽培進出の事實もその有利性を暗示している。)その結果、過去三〇年に互つてマレーは多量の米を輸入せねばならなかつた

米生産額、輸入額及消費額

年次	生産額 (1,000噸)	純輸入額 (1,000噸)	消費額 (1,000噸)	生産額(2) の純輸入額 (3)に對する 割合%	生産額(2) の消費額 (4)に對する 割合%
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1920	162	336	498	48	32
1925	239	403	642	59	37
1928	203	524	727	39	28
1929	190	552	742	34	26
1930	160	592	752	27	21
1931	264	516	780	51	34
1932	296	409	705	72	42
1933	300	433	733	69	41
1934	337	453	790	74	43
1935	331	475	806	69	41
1936	342	534	876	64	39
1937	319	573	892	56	36
1938	299	612	911	49	33
1939	341	659	1,000	52	34
1940	335	635	970	53	35
×1946	225,044	136,434	361,478	165	62
×1947	257,164	237,119	494,283	108	52
×1948	343,065	449,565	792,630	76	43
×1949	307,180	483,391	790,571	64	39
×1950	435,840	492,788	865,628	88	50

(資料…前表の資料と同じ) × 1946年以降は、単位=ト

(右表参照)。この事實はゴム價格の高い時は餘り問題とならなかつたが一九三〇年以降の不況期にはマレー經濟の弱點として前景に押出され、政府は稻作擴張のための諸政策を積極的に行わざるをえなかつた。(ゴム價格は一九三二年には一九二八年の二〇

%にまで低落したが、ビルマ、シャム、インドシナ米の價格は同一時期に三〇%臺に低下した。)同時に又、ゴムの單一栽培は急速な作付轉換も出來ず不況の打撃を眞向から受けることとなり、生産制限對策も成功せず、第二次大戰勃發による需要増大で辛うじて危機を切抜けた。しかし大戰中の合成ゴム工業の發展、アメリカ、南アメリカ等のゴム生産の増大、戦後におけるインドネシアのゴム増産等の競争、更に戦後アジアの米不足というような諸要因からマレーに於ける稻作擴張とゴム栽培の將來性の問題はマレー農業構造の特殊性と關連して再び一層困難な問題として浮び上つてきた。

(1) 稻作擴張の問題。マレーの稻作適地は海岸沿いの廣い沖積平野、内陸に散在する狭小な低地及び河川沿岸の沖積地である。最も重要なのは海岸沖積平野であり現在の稻作の半分を占め特にはあるが米の商品化も見られる。しかし海岸沖積平野の大部分はゴム、油椰子等輸出作物に占められ、殘餘の未開發地の多くは灌漑排水施設を行わないでは稻作に利用し得ず、又泥炭の厚い層を含むために不適の土地も多少存在する。河川沿岸の沖積地(ペラク川及バハン川等)も稻作に利用されているが、特に東岸地方では降雨が多いために洪水の害を受けることが多く治水設備を現在のままにしては利用價值が低い。マレーの稻作分布が非常に分散している原因は一つは自然的條件の制約にあるが、むしろ、マレー人の主要居住地方に在來技術を以て可能な限り自家消費向稻

作を至る所に行つてゐること、稲作最適地たる海岸沖積平野に於てはゴムその他の競争により伸び得ないことにある。稲作適地は尙相當廣汎に存在すると言ひ得るであらうが、現在のマレー人稲作技術特に幼稚な傳統的灌漑法——全く降雨による河水氾濫に依存し人工灌漑を行わない場合も多い（東部地方）——によつては稲作擴張の餘地は少いであらう。

マレーの稲作が殆んどマレー人による自給目的の小經營（二七エーカー）であり、そのかたわら現金収入のために輸出作物ゴム・ココ椰子等を作つてゐる場合には、これらの稲作への轉換は技術的・經濟的に相當困難を伴う。戦後の米不足、米價騰貴は著しいが同時にゴム・ココ椰子産物價格も上昇を示した。政府のマレー人に對する稲作奨励政策にも拘らず戦前から彼らは自給程度以上に稲作をすることを嫌う傾向があつたが、この傾向は戦後政府の稲作補助金・灌漑排水施設強化政策にも拘らず依然として存在するらしく、稲作面積の著しい増加は見られない。マレー人の手中に稲作が傳統的技術のままに委ねられるならば、恐らくは彼らの自家消費生産に停滯し商品米生産への發展は困難ではなからうか。他の商品作物栽培との得失比較を稲作に有利に導き商品米生産にまで發展させるためには、後れた技術段階にある稲作の低生産性を引上げる政策（灌漑排水施設の強化・品種改良・施肥機械化等）が強力に遂行されねばならないであらう。内陸地方の一層後れた自給稲作農民に對しては新たな欲望を刺激する如き諸政策をさへも必要とするであらう。

稲作地としてはマレーは自然的條件（土壌・氣候・病蟲害等）から見てビルマ・シャム・インドシナに比しては適地と言ひ難く、經濟的にもこれら三國の稲作との競争に堪え得るか否かに問題がある。マレーの米の全消費量を自給するまでに稲作を發展させることは、戦前の如く殆んどマレー人の手中に放置しような政策では到底不可能であるが、華僑及びインド人移民等に廣く稲作を解放し——戦争直前には許されたがそれまでは稲作はマレー人に限られた——、米の商品生産を助長するために現在の低い技術・生産力を向上させ他の商品作物との競争力を強化するような政策が強力に進められるならば、相當の長期間と困難を伴うが充分可能であらう。

戦後政府は、ゴム一本のマレー農業改編の一環として稲作の發展を積極的に採り上げ、灌漑排水事業を主としてその他多收純生産の育成普及・開拓・機械化耕作・施肥實驗等に努力している。マレーの稲作付面積は戦後漸次増加傾向を示しているがこれは戦後の高米價及び政府の灌漑排水事業に因るものである。

(2) ゴムの將來性。戦時中の南部インド、セイロン、アフリカ、及び南アメリカに於けるゴム栽培の發展、更に戦後インドネシア・ゴムの急速な回復によつてマレー・ゴムが強力な競争に直面する可能性は戦前より一層大きくなつた。又、最大の輸出市場であつたアメリカに於ける合成ゴム工業は、コストに關しては尙天然ゴムの方が低いが軍事的見地から補助金を與えられる限りその存続を保證され、ひいて天然ゴム價格を壓迫する。一度生産過

剩となれば、マレー・ゴムはコストがインドネシア・ゴムに比して相當に高いことにより打撃を蒙ることとなる。

マレー・ゴムは經營形態・主體別に見て二つの型のあることは既に述べた。好況期に於ては問題はないが、不況期にはマレー人の副業的小經營は、現金入手のために價格が下落しても尙採算を無視して生産を續けることが歐米人大農園に比較して容易である。

マレーの歐米人大農園はマレー人小經營に比し良質ゴムを生産するがコストに關しては比較的高い賃労働並に近代的經營組織に依存するところから高くならざるを得ない。従つてゴム價格の下落に對する競争力はマレー人經營に及ばない。(このことは華僑經營の中小農園を歐米人經營及マレー人經營に比較した場合にも同様である。)更にマレー・ゴム特に大農園ゴムとインドネシア・ゴムを對比する時マレー・ゴムは單位面積當り收量・技術・經營ともに相當劣るといわれる。

従つてマレー・ゴム栽培の競争力を増大し、ひいてマレー經濟の安定をはかるためには大農園ゴムのコスト引下げ、危険分散對策が必要となる。コスト引下げのためには「芽接法」(Clone system)の普及による單位當り收量の増加が最も手近な方法として考えられる。危険分散對策としてはゴムの單一栽培農園に新作物——例えばココア——を導入して多角經營化する方法である。しかし熱帯農業に於ける新作物導入の研究は既に至る所の熱帯植民地で多くの種類について試みられ激烈な競争を経て各地に確立されたものである。マレーのゴム單一栽培も又その例にもれ

ない。従つてマレーの諸條件に適合してしかも獨占的供給を保持し得る如き新作物を研究し導入することには甚大な困難を伴う。

ゴム單一栽培に伴う危険は既に不況期の苦境を経験して充分知られていることであり大農園關係者は早くから研究機關を持つて對策に腐心して來たが、戦後の中・小經營及びインドネシアその他の發展に伴う競争激化の可能性は、戦前も國際ゴム生産制限の場合より一層統制を困難にするであろうし、それだけに大農園ゴムの安定化對策は一層眞剣に考えられねばならない。(ゴムその他輸出作物農園の労働力が殆んど移民に依存していることは、これら輸出作物價格の不安定によつて労働問題に特殊な性格を與えマレーを常に出稼植民地たらしめることとなる。)

ゴムその他輸出作物大農園に對する政府の態度はゴム生産費切下げ、油椰子・ココ椰子栽培の集約化、新作物導入を促進することにある。他方、政府は中・小經營に對してはココ椰子・パイナップルその他の商品作物をゴムと併せ栽培し、經營の多角化・集約化によつて危険分散をはかるという態度乃至政策を採らうとしている。

ゴムと錫の二つに餘りにも偏したマレー産業の多樣化を政府は漸次實現すべく意圖せざるを得ないであろう。然し又、その政策遂行のために大きな財政的基礎を與えるものは、ゴムと錫の二つである。